

日本人の多くは、大きな揺れを感じると、机の下に潜る。これは、小学校の時に何度も訓練させられて体に刷り込まれた行動であり、低学年時の防災教育の効果がよく分かる。一方、国民の多くは、地震なんて滅多に来ないと考え、防災対策を二の次にしている。静岡県民ですら家具の大部分を固定している家庭が9%しかない実態は、地震に対する認識の低さを証明している。地震の活動期を迎えた今こそ、防災教育の再構築が必要である。

誰しも危機感が無ければ真剣な勉強はしない。まず、教員も含めて地震についての危険を認知する必要がある。地震の切迫度を示し、地震時の衝撃的な揺れや被害の映像を見せ、身の回りの危険の多さを実感させることが、意識を啓発し、真剣な勉強の契機となる。

次は、発災時の危険回避行動のための教育である。総合学習の時間を使って、多数の被害画像を示し、発災時に発生する様々な事象をインプットする。その後、発災時のイメージネーション訓練を行い、危険回避行動の判断材料を与える。できれば、起震車で揺れの体験や家具の転倒実験、暗所での避難訓練、高所飛び降り訓練などの体験学習を行い、速やかな対処行動を身につけさせたい。

3番目は、災害予防のための地震の仕組みと地震の被害についての教育である。理科の時間には、地震の発生原因や、揺れと地盤の関係などの地震の基礎を分かりやすく解説する。社会の時間には、町の災害の歴史、土地の形成、地形と災害との関係を学ばせる。フィールド学習の中では、町の安全点検をさせる。さらに、簡単な実験教材を使って、建物の揺れ、建物被害の原因、家具の転倒の様子を教え、その上で我が家の危険度チェックをレポートさせる。

最後は、形骸化した防災訓練の活性化である。毎年趣向を凝らして、地震の怖さを感じながら躍動的に楽しめる体験学習の場に変身させる。できれば親子参加型の地域ぐるみの催しにしたい。本紙週間地震新聞でも紹介された親子防災スクールは良い見本になる。筆者も地震教室を開講させて頂いたが、子供たちの真剣な眼差しは忘れない。

このように、総合学習、社会、理科、フィールド学習などを有機的に組み合わせて、実のある魅力的な防災教育を実現したい。真の防災力の向上には、市民の意識向上と地域コミュニティの育成が何より必要である。小中学校での防災教育が、広く地域に根付いていくことが望まれる。